

【現地報告】

ウイльта語教室：「シレイ・セーックレ」

(ロシア・サハリン州ノグリキ町)¹

山田 祥子

2010 年秋、ロシア・サハリン州北東部のノグリキ Ноглики 町でウイльта語教室が始まった。教師は、ウイльта語北方言の話者であるエレナ・ビビコワ Елена А. Бибикова さん (1940 年 生まれ [写真 1])。各回の出席者は親戚・知人 5~10 名程度という小さな規模ではあるが、民族や年齢の境なく自主的に集まっている。2011 年 2 月現在、ノグリキ町立郷土博物館の展示室で平日夜、週 2 回のペースで継続している。

ウイльта語教育の現状

サハリンの先住民族ウイльтаの言語であるウイльта語 (言語の概要については本誌山田研究ノートを参照) は、いまや消滅の危機に瀕している。話し手がわずかでも残っているうちに言語の保存・教育が急がれるところであるが、その取り組みは必ずしも順調ではない。

1990 年代から書記法の開発が進められ、2008 年によりやく文字教本 (Ikegami et al. 2008) が刊行された (笹倉 2010 による書評も参照)。これは、ウイльта語教育の継続的な実施に向けた大きな一歩であった。しかし、公にこれを教材として活用しているのは南のウイльтаの集住地ポロナイスク Поронайск 市郊外にある第三学校 (小中高一貫・寄宿制) のみである。同校では、文字教本の編者の一人であるシリユコ・ミナト Сирюко Минато さん (1943 年 生まれ) が 2・3・4 年生を対象にウイльта語を教えている (Missonova 2010: 107 ; 2011 年 1 月、筆者の現地調査でも確認)。

一方、北のウイльтаの集住地であるヴァル Вал 村では、同じく文字教本編者の一人イリーナ・フェジャエワ Ирина Я. Федяева さん (1940 年 生まれ) が、2010 年夏まで勤務先の幼稚園でウイльта語の詩や踊りを教えていた。しかし、フェジャエワさんが退職してからは授業が行われていない (フェジャエワ p.c.)。

文字教本の編者以外にウイльта語を教えることのできる教師がいないことが根本的な問題で、教師用教材や教員養成の必要性は明らかである。しかし、そのための積極的な取り組みは現在のところ見られない。

ノグリキ町でウイльта語教室を開始²

ヴァル村から南へ 66km 離れた町ノグリキに住むエレナ・ビビコワさんもまた、文字教本の編集に携わった精力的なウイльта語話者の一人である。同町に住むウイльтаはごく数世帯であるが、



写真 1 エレナ・ビビコワさん：ウイльта語文字教本を手 (2010 年 10 月 22 日)



写真 2 最も積極的な参加者二人：10 代前半の子どもたち（2011 年 2 月 9 日）



写真 3 大人も、子どもも（2010 年 12 月 3 日）



写真 4 授業風景（2010 年 12 月 3 日）

民族の境なく身のまわりの若い世代にウイлта語を学んでほしい、とビビコワさんはかねてから願ってきた。2008 年の文字教本刊行以来、行政や地元企業による企画や支援を期待していたが、目立った動きは起こらなかった。

2010 年 10 月初め、ビビコワさんは「上」からの企画ではなく自主的にウイлта語教室を始めようと決意した。ウイлта語調査のために長期滞在中³の筆者も賛同し、二人で招待する人の名前をリストアップするところから着手した。当初、ビビコワさんの自宅で行うことを考えたが、招待する相手が多すぎて小さなアパートでは狭すぎる。思案の末、ノグリキ町立郷土博物館に会場を借りることにした。同館の賛同を得て、平日の夜に展示室で集まることになった。

参加者

はじめの数回は開始時間になっても人が集まらず、気を揉むばかりであったが、ビビコワさんの地道な声かけで、次第に 4、5 人の常連メンバーが定時に来場するようになった。そのほかに時々顔を出す人や見学者が加わって、開始から 4 カ月たった 2011 年 2 月現在では、多いときで 12 人ほど集まる。

参加者の最年少は 3 歳、最年長は 70 歳。なかでも最も積極的なのは 10 代前半の子どもたちである [写真 2]。彼らの真っ直ぐな好奇心とパワーに引っ張られるように、夕方仕事を終えた大人たちも足を運ぶ [写真 3]。

年齢だけでなく民族も、ウイлта・エヴェンキ・ニヴフ・ロシア人・日本人と、実にさまざまである。ウイлта語に興味のある人なら誰でも歓迎というのが、この会の特徴といえよう。

内容

もと小学校教師をしていたビビコワさんの教え方は、非常にシンプルでわかりやすい。文字教本 (Ikegami et al. 2008) を広げ、挿絵を見ながらウイлта語で *xai tari?* 「これは何?」、*yii tari?* 「これは誰?」、*xairinee?* 「何してる?」などと質問を繰り返し、参加者がそれに答える、というのが授業の基本となっている。参加者は一人一人自分の単語帳を作って、自主的に語彙を書き込んでゆく [写真 4]。

文字教本を使った授業の合間には、ビビコワさん考案のウイлта語体操 [写真 5] やゲーム、なぞなぞや歌といった内容が盛り込まれ、参加者を飽きさせない。とくにゲームでは、子どもたちを中心に多に盛り上がる。また、「お勉強」の後にはお茶とお菓子の時間が恒例になっている。



写真 5 「お勉強」の合間に、ウイлта語体操 (2010年12月17日)

シレイ・セーックレ *silai saakkura*

この教室は、企画者であるビビコワさんの発案によりウイлта語で *silai saakkura* (意味は「淡紅色のイソツツジ」) と名付けられた。発案の理由は、二つあった。

一つ目の理由は、希少かつ開花時間が短い「淡紅色のイソツツジ」のはかなさと、いまや忘れ去られつつあるウイлта語のイメージが重なったことである。イソツツジという植物そのものはこの地域で珍しくはないが、そのなかでも淡紅色の花は6月初旬のツンドラで、ごくまれにしか見られないのだという。

二つ目の理由は、ウイлта語で *silai saakkura* という発音が、日本語の「シロイサクラ (白い桜)」の音と少し似ていること⁴である。ビビコワさんは、池上二良教授 (現北海道大学名誉教授) をはじめウイлта語の記録・保存に関わってきた日本人に対して恩恵と親しみを感じておられる。その意味で、日本語にも似た響きのウイлта語で、*silai saakkura* と名付けた。

今後の発展と継続に向けて

まさに草の根的に始まったウイлта語教室であるが、ノグリキ町立郷土博物館の賛同を得たことは大きい。いつでも集える場所が用意されたということだけではない。同館は、イベントなどをおしてウイлта語教室の成果を地域に発表する機会を提供している。こうした成果発表の積み重ねによって、この取り組みが地域に理解され、支援の輪が広がることだろう。

また、この取り組みを長く続けていくためには、後継の教師を育てる必要がある。現在はビビコワさんが指揮を執っているが、近い将来には参加者の一人に企画と授業進行を引き継ぐ予定である。そのために、時々授業進行を交代して今から訓練を始めている。

さらに、今後この取り組みが発展・継続していけば、新たな教材が必要となるだろう。現在のところ、文字教本以外の教材はビビコワさんがすべて手作りしている。だが、先行研究によるウイлта語記録資料を編集すれば、副読本を作ることも可能であろう。また、筆者が集めている録音やテキストも、将来的には言語教育に役立つ教材として現地に還元することのできるように、調査・研究を続けていきたい。

注

- 1 本稿執筆にあたり、ウイлта語教室参加者の方々に顔写真掲載をご了承いただいた。写真はすべて筆者撮影による。なお、本稿で用いるウイлта語表記は、本誌山田研究ノートに準ずる。
- 2 以下の内容の一部は、山田 (2010) にも掲載している。
- 3 日本学術振興会・平成21年度第2回優秀若手研究者海外派遣事業 (特別研究員) により、2010年4月～2011年3月サハリン州立郷土博物館に派遣。ノグリキ町を拠点として、ウイлта語調査・研究を行

う。なお、本研究は文部科学省科学技術研究費補助金（特別研究員奨励費；21・2110）の助成を受けている。

4 このことは筆者がビビコワさんに指摘した。ビビコワさん自身は日本語を解さない。

参考文献

笹倉いる美

2009 「【書評・紹介】池上二良ほか編「ウイльта語を話しましょう」」『北海道民族学』5: 30-34, 北海道民族学会.

山田祥子

2010 「サハリンだより vol. 3 : 秋の夜長に、ウイльта語教室」『友の会ニュース』77: 1, 北海道立北方民族博物館.

Ikegami, J., E. A. Bibikova, L. R. Kitazima, S. Minato, T. P. Roon, & I. Ja. Fedjaeva

2008 *Uiltadairisu: Govorim po-uil'tinski. Juzhno-Sakhalinsk: Sakhalinskoe knizhnoe izdatel'stvo.*

Missonova, L. I.

2010 “Rozhdenie pis'mennosti uj'l'ta v 21 v. (Problemy Etnosotsial'noj zhizni jazyka malochislennogo naroda)”. In *Etmograficheskoe obozrenie*, 2010/No.1: 100-115, Moscow: Izdatel'stvo Nauka.

(やまだ・よしこ／北海道大学大学院文学研究科博士課程、日本学術振興会)